

反戦の声

内村鑑三と与謝野晶子

ドロン・B・コヘン (Doron B. Cohen)

要旨

1904-05年の日露戦争は、日本が東アジアおよび太平洋地域において帝国主義的覇権を掌握して行く上での重要な第一歩であった。開国後のわずか数十年の内にヨーロッパの帝国を破ったことで、日本は自国の能力に大きな自信を持つこととなる。日本の軍国主義的、帝国主義的な野望に異議を唱えたのは、数名の知識人にすぎなかった。そのうちの何人かは厳格な平和主義の立場をとっており、キリスト教指導者であった内村鑑三もその一人である。彼は、自身の武士の血統に誇りを持ちながらも、次第に厳格な平和主義の見解を採り入れ、果敢に主張するようになった。また、与謝野晶子は別の角度から、戦争を非難する有名な詩を書いている。しかし、彼女の立場は思想的というよりは個人的なものであり、第二次世界大戦へと至る数年の内に変化し得るものであった。戦争による惨状を受けて、日本は平和主義的な憲法を採択したが、国内では改憲を叫ぶ声が強くなってきている。

キーワード：内村鑑三、与謝野晶子、日露戦争、平和主義、詩

今日、日本は平和な国である。戦争という手段によって紛争を解決することを禁止する憲法が採択され、この平和が築き上げられたのであるが、当然、第二次世界大戦終戦までは事情は異なっていた。大戦以前では、平和主義の理念を支持する者はごくわずかであった。とはいえ、すでに19世紀後半には、その種が撒かれ始めていたのである¹⁾。日露戦争前夜には、日本で初めて平和主義が公に語られた。また、戦争の最中であっても、国家の軍国主義的な政策に対して断固として果敢に反戦の声を上げ続けた、特異な日本人が存在したのである。本稿では、これらの人々の内、主に次の二人を取り上げてみたい。一人は、揺るぎない信条に基づき戦争に反対したキリスト教指導者、内村鑑三であり、もう一人は、自身の感情を極めて個人的な形で表現した詩人、与謝野晶子である。

本稿は、Doron B. Cohen の口頭発表 “Voices of Dissent: Uchimura Kanzō and Yosano Akiko” (2004年2月、エルサレム、ヘブライ大学) の翻訳である。

内村鑑三は明治時代の代表的な知識人の一人であり、彼の著作は現在でも多くの人々を惹きつけて止まない。日露戦争の文脈における彼の平和主義的思想を検証する前に、一旦、彼の社会的、個人的背景を瞥見してみたい。

明治時代に入ると、日本は長い鎖国の時代に別れを告げ、再び世界に向かって門戸を開放した。開国するやいなや、短期間のうちに世界中のありとあらゆる種類の革新的な技術や思想が日本に流入することとなった。最も革新的な思想の幾つかは、キリスト教の経路を通してやって来た²⁾。自由、人権、男女平等などといった思想はもちろんのこと、社会主義や平和主義を提唱した日本人の多くがキリスト教信徒や、少なくとも人格形成の初期段階でキリスト教教育を受けた人々だったのである。彼らの中には、最終的に自身の信仰を捨てて他宗教に改宗したり、民族主義へと転向したり、かつてキリスト教信仰を抱いていたことを否定する者さえいた。大雑把に言ってしまうと、激動の時代だったのであり、まるで早回しのフィルムのような時代の流れの中で、多くの日本人がわずかに数年の間に熱狂と失望を味わったのである。しかしながら、厳しい自己犠牲を強いられながらも、勇敢に彼らの信仰を信奉し、守り抜いた人々もまた数多く存在したのであった。

キリスト教が日本に初めて伝えられたのは16世紀のことであり、カトリックの商人と宣教師が日本に上陸し、「キリスト教の世紀」として知られる一時代を切り開いた。この時代の中に、日本におけるキリスト教布教は意外なほどの成功を収めたが、それは長くは続かなかった³⁾。17世紀初頭に、時の政権は鎖国を採択し、死刑の脅威のもとにキリスト教信仰を禁じたのである。19世紀中葉以降に鎖国が解かれると、キリスト教は再び日本に戻り、日本の土壤に硬く根を下ろすこととなった⁴⁾。

最初にキリスト教を受け入れたのは、主に明治維新の際に政権闘争に敗れた側の若い武士達であった。薩摩、長州藩が権力を握り、佐幕派の勢力を追い落とした後、旧幕府側の若い世代は知的教養を通して立身出世の道を切り開いていこうとしたのであるが、実に多くの場合、キリスト教のそれだったのである。後にも若干続くことであるが、組織的な宣教団が日本に設立される以前の初期の段階では、それは大抵の場合、正規のキリスト教的な教養ではなかった。時の日本政府に招聘された多くの技術的なエキスパート、特に彼らの中でもアメリカ人は、ただ彼らの公式の学科を教えるだけではなく、キリスト教信仰に基づいて若い生徒達を指導することが自身の使命であると信じていた。これらの教師は、近代西欧の教養と文化がキリスト教と不可分の関係にあるという確信を生徒達に植え付けた。彼らは、必ずしも確立した教会との関係に基づくものではないにせよ、聖書とピューリタンの道徳に根ざしている個人的な信仰を説いた。そのようにして彼らは、多くの若い熱心家が外来の宗教を道徳のシステムとして取り入れ、新し

い明治政府の体制の確立に伴い急速に崩壊しつつあった武家社会の価値観に代わるものを、キリスト教信仰の中に見出すことを容易にしたのである⁵⁾。

明治時代の初期の頃は、天皇に対する忠誠心は未だ神聖な価値観とはなっておらず、また、新しい道徳性 全ての人間は、主君のためにではなく、むしろ自分自身のために生きる、といった も幾世紀にもわたる武家教育の後では、よこしまで不正なものとみなされていた。唯一にして、全能である神への信仰と、キリスト教精神において社会改革に取り組むという使命は、かつて武士であった人々にとって精神的空白を満たすものであった。しかし、無数のキリスト教教会、教派、組織を代表する本格的な宣教師や、当惑している、素朴で若い改宗者の面前で、直ぐに論争を始める宣教師達は、初期のキリスト教布教の成果を台無しにすることも多かったのである。

内村鑑三は、日本におけるキリスト教受容の熱狂的な第一世代の産物ともいえる人物である⁶⁾。彼は、明治天皇即位の年には7歳であり、質素な武士階級の家庭の長男であった。彼は回想録の中で、徹底して軍人であり、長い太平の世にあって己の武芸を發揮する場がなかったことを悔やんでいた祖父について語っている。内村の父もまた武芸を仕込まれていたが、生来の学者であった。内村は、武士の家柄を誇りに思っており、60歳の時に、若い頃学んだアメリカの大学に提出する個人情報欄の国籍欄に自らの出自として「日本の侍」と記したほどであった。

内村は若い頃から優れた才能を發揮し、16歳の時に政府の奨学金を得て、遠く離れた、当時開拓中であった北国の北海道札幌市に新設された農学校で学ぶこととなる。この学校は、内村が入学するわずか1年前に出来たばかりであり、その設立にあたっては、マサチューセッツ州アーモストに同様の学校を設立していたアメリカ人の専門家、ウィリアム・スミス・クラークの尽力があった。クラークが札幌で過ごした期間はわずか8ヶ月に過ぎないが、学生達に消え入ることのない影響を残し、彼の標語だとされる「少年よ大志を抱け」のおかげで、もはや伝説の人物として語り継がれるようになっている。西洋人の耳にはごく自然に聞こえることでも、儒教的な伝統の中で育った若者にとっては大きな刷新だったのである。クラークは彼自身の草案した「イエスを信ずる者の契約」に署名することを学生達に納得させた。内村もまた、学友と共に、先輩の学生達からそれに署名するように強く促された。非常に真面目な少年であり、仏や神道の神を信仰してきた先祖に畏敬の念を抱いていた内村は、彼らに反抗しようとしたのであるが、圧力に耐え切れず、ついには屈することになったのであった。

内村は、その感動的な自伝の中で、キリスト教に改宗した若者として体験した、この頃の精神的危機と、最終的に揺るぎないキリスト教信仰へと至る長い道程について語っている⁷⁾。後に、内村とその学友は明治時代の知的エリートの一員となり、互いに別々

の道を歩むようになった後も、生涯にわたって交友関係を保ち続けた。これらの若者達は、彼らがキリスト教信者の共同体の原型である「エクレシア」に引き比べたところの、小規模で、単独で、独立した信仰共同体において、特異な宗教的、社会的経験をしている。内村は、キリスト教徒となっても、決して独立の信条を捨てることはなく、晩年には、しばしば彼の名を連想させる「無教会」、すなわち教会を持たないキリスト教の信条を展開した。「無教会」とは、形式的な既存の体制なしに、聖書と、信者の個々人の宗教体験とによって導かれる、小規模で独立した共同体に基礎を置く信仰を差すものであった。

内村は、農学校を優秀な成績で卒業した後、政府の役人になる。しかし、信仰の危機をも孕んだ一連の人格的危機を経た後、アメリカへ旅立ち 実際には逃避し、そこで3年半の年月を送ることとなった。アメリカ滞在期間の大部分をアーモスト大学での勉学に費やす間に、彼は実り豊かな精神的成長を遂げたのであるが、それはキリスト教の救済の唯一性に対する揺るぎない信仰を決定付けたのである。内村は、厳格なピューリタンの信条を信奉し、これを武士の伝統である武士道の精神になぞらえた。武士道に関する有名な書物を著した学友の新渡戸稲造と同様に⁸⁾、内村は、武士道における軍隊的な側面よりも、むしろ騎士道的な徳や誠実の精神を強調したのであった。

帰国してから数年の間、内村は、複数の学校で教鞭をとった。その一つに第一高等学校があるが、これは当時最も有名な学校であり、多くの生徒を東京大学へ送り込んでいた。しかし、明治時代で最も悪名高いスキャンダルの一つとなる事件の後に、彼のこの学校での教職は窮地に立たされることとなったのである。1891年に「教育勅語」が公布されると、学校の教師や生徒は、その末尾にある天皇の署名に向かって最敬礼をするように命じられた。この要求に対し、キリスト教の信条に忠実である内村は、頭を軽く下げることはしなかった。内村を快く思わない人々はこの出来事を取り上げ、不敬事件であると吹聴し、日本人キリスト教徒の疑わしい「二重の忠誠」を攻撃するために利用したのである⁹⁾。この衝撃的な事件の後、内村は教職を退いて著作や論文の執筆活動に専念するようになる。彼はしばらくジャーナリストとして活動し、亡くなるまでの30年間にわたって個人の月刊誌「聖書之研究」を発行し続け、多数の無教会主義キリスト教徒の忠実な一般会衆に対し、精神的指針として献身したのであった。

実際に、日本のキリスト教徒の中に「二重の忠誠」の事例が存在していたのだとしても、内村はそれに類するものではない。それどころか、偏見なしに見れば、彼は日本の愛国主義者とさえ考えられるかもしれないのである。彼は、日本が、東洋と西洋の架け橋として、武士道とキリスト教を通じて両文化圏を結び付けるといふ、独自の役割と能力を有する国であると信じていた。英語で書かれた有名な記事の中で、内村は彼の「ふ

たつの「J」への愛、つまり“Jesus”と“Japan”への愛を述べている。彼にとっては、この二つの愛の間には、なんら矛盾がなかったのである¹⁰⁾。内村は、愛国心の価値を信じており、真の男子は自分の国を情熱的に愛するものだと言ったが、真の愛国心と誤った愛国心は区別されなければならないということにも気付いていた。国粹主義と軍国主義からの脱却なしには、日本は、その真の使命を果たすことはできない。さもなければ、日本は主の御手によって多大なる罰を受けることとなる、と彼は預言している。内村は、聖書を、彼自身の時代について語られているかのように読むのが常であった。それゆえに彼は、当時の日本とロシアの関係が旧約時代のバビロニアとユダ王国の関係であり、ロシア皇帝は現代のネブカドネザルだと確信していたのである。つまりこのことは、実際に日本はロシアの脅威に晒されているのではあるが、神の意志に従わなければかつてのユダ王国と同じ運命を辿る、ということの意味するのである。

日清戦争と日露戦争の間の10年間、内村は、政治的、社会的問題についてしばしば言及している。この10年の間に、国民の権利を犠牲にしてまでも「国益」の優先を追い求める政府と、国民の権利に至上価値を置くりベラルな知識人が率いる反対勢力との間のギャップは、更に拡大してゆく様相を呈していた。反対勢力がラディカルになるにつれて、政府の締め付けは一層厳しくなった。内村は政治活動に活動的に参加するということではなかったが、この十年間の彼の全ての論説は時事的な問題を扱うものであり、そこからは明確で確固とした反対者の声を聴き取ることができるのである。内村が世間の注目を集めたのは主に1897年から1903年にかけてのことであるが、その期間、彼は有力紙「万朝報」に寄稿記事を掲載し、軍縮、自由教育、普通選挙権等を支持している。彼は、常々彼が「薩長政府」と呼んでいた明治政府を痛烈に批判し、他の評論家と長期間にわたる論争を展開した。内村を社会主義者とする人々もいたが、彼は常に物事をキリスト教倫理のプリズムを通して観察していたのであり、多かれ少なかれ、どのような場合でもキリスト教倫理が彼を導いていたのである。このような信条によって内村は、この10年の間に次第に平和主義の立場へと導かれていった。この過程は、彼の長きにわたる内的葛藤、すなわち、生来の愛国主義思想と、それによって彼の判断が厳格で、時に融通のきかなくなるところのキリスト教信仰との間の葛藤を示唆している。武家教育を修得し、また、自国への深い関心をも持ち合わせた一人の人間にとって、純粋な平和主義を説くことは極めて困難であったに違いない。

日清戦争最中の1894年8月に、内村は「日清戦争の義」と題された論説を発表した。そこではまだ、正義の戦争というもの存在する、と主張されている¹¹⁾。その例として、聖書にあるギデオンのみディアン人に対する戦い、ギリシアのペルシア帝国に対する戦い、スウェーデン王グスタフ・アドルフによるカトリックの抑圧に対する戦いが挙

げられている。内村は、現行の戦争の場合、日本の戦争理由は純粋なものであり、それは、清に国際的なコミュニティへの協同を納得させ、朝鮮を清の圧政から解放することであると説明した。しかし、彼は直ぐに深い失望を味わうこととなった。日本が、自国の利益のために朝鮮を利用するつもりであったということが解ったからである。内村はアメリカ人の友人に宛てて次のように書き記している。「『正義の戦い』は、盗賊の戦いに近いものとなってしまった。この戦争の『義』を口にした預言者は今、大いに恥じている」¹²⁾。内村は、1896年に一連の論説を発表し、その中で、政府の偽善に対して、また、政府が朝鮮を助けるどころか軍備を増強して次の戦争に備えていることに対して批判をした¹³⁾。

日本とロシアの間の緊張が高まるにつれ、これから起こるであろう戦争に反対する内村の立場は益々強固なものになっていった。1898年に書かれた論説においては、まだ、日本が受けた屈辱を晴らすことに期待を寄せ、ロシアに「借りを返す」と脅迫していたが、1903年までには、何を差し置いても平和を第一に説くようになる。彼の平和主義は、当時最も影響力のあった新聞「万朝報」の紙上で支持を得ることとなった。内村は平和主義の基礎をキリスト教の信条に置いていたが、編集部の他のメンバーであった幸徳秋水と堺利彦は初期社会主義思想の原理にその基礎を置いており、政治的な利害達成の手段としての武力行使に対して反対を表明していた。幸徳秋水は1903年5月1日に「非開戦論」と題された論説を、同年6月19日には「開戦論の流行」と題された論説を発表した。内村も、同年6月30日に「戦争廃止論」と題された論説を発表し、戦争とは「大罪悪」に他ならないと言明している¹⁴⁾。しかし、「万朝報」の発行者、黒岩涙香が開戦直前に至って政府への支持を決定すると、この三者は「万朝報」と袂を分かつこととなった。

「万朝報」から身を退く前後にかけて、内村は、彼の反戦に関する見解を論説の中で詳しく説明している。今や彼は、たとえそれが自由のための戦いであろうと、正義の戦争など存在し得ない、と主張するようになっていた。内村は、右の頬を打たれれば左の頬を差し出せというキリスト教の信条を、国家に適用したのである。「万朝報」に掲載した最後の論説において、彼は、日本はキリスト教の道德性に立脚して全ての戦争準備を中止すべきであり、その振る舞いによってロシアは恥じ入って同じ行動を取り、戦争は未然に防がれるだろう、と述べている。当然のことながら、そのような政策を採用しようとする者は誰もおらず、また、戦争が始まると、内村自身も日本が実際に「借りを返している」ことに興奮せずにはいられなかった。1904年2月、彼は、同じく平和主義者であった友人に宛てて次のように書き記している。「今日、私は、我が帝国海軍がロシア海軍に大勝利を収めた記事を見てかつての愛国主義者に戻ってしまった。『大日

本帝国万歳』と近所中に聞こえるような大声で三度叫んでしまった。なんと矛盾した男であることか！」¹⁵⁾。

内村が、良心的兵役拒否者を支持しなかったことから、彼の矛盾した一面を垣間見ることができる。彼の弟子の一人が熟慮の上で戦争に抗議して徴兵を回避しようとしたとき、内村は、とりわけ、このことによってもたらされる弟子の家族への然るべき措置を考慮して、その行動を思いとどませたのである。彼は、戦争への参加が必ず他人の死を引き起こすということを知っている平和主義者の基本的なジレンマに対し、明瞭な答えを与えることはなかった。内村は、戦いに臨む者は死を覚悟しなければならない、という伝統的な武士の見解を受け入れたように思われる。戦争における平和主義者の死は、平和の理念を推し進めるための犠牲と見なせるのだ、と彼は信じていたのである。

その数々の矛盾にもかかわらず、内村は頑なに戦争反対の立場をとった。ロシアとの戦争の間に、彼は英字新聞「神戸クロニクル」に一連の論説を掲載している。その中で、内村は、日本の大義を擁護しながらも、世界に対する責任を強調し、自然的、歴史的根拠に基づいて戦争の理念を非難した。そして、終戦の直後、彼は次のように述べている。「戦争は戦争のために戦はれるのでありまして、平和のための戦争などとは曾て一回もあつたことはありません、日清戦争は其名は東洋平和のためでありました、然るに此戦争は更らに大なる日露戦争を生みました、日露戦争もまた其名は東洋平和のためでありました、然し是れまた更らに更らに大なる東洋平和のための戦争を生むのであらふと思ひます」¹⁶⁾。まさしく、明瞭かつ優れた発言である。

反戦の論拠を探究する努力の中で、内村はまたユダヤ人にも注目した。彼は、ユダヤ人が領土や軍隊を持っていなかったにもかかわらず、有能な民族として生存に成功したことについて、広範に言及している。内村は、この成功の理由を、彼らの平和主義、聖書への信仰、変わることをないメシア待望に帰している¹⁷⁾。後に、内村自身もメシアの再臨を待望するようになった。第一次大戦の間に、内村は人類の進歩と良心への信頼に幻滅し、世界を全体的な滅亡から救い出すキリストの現臨を待望する終末論的希望に依り頼むようになったのである。

先に、内村が1920年にアーモスト大学の卒業生評議会に提出した個人情報について触れた。そこでは、彼は自身を「日本の侍」と定義していたのであった。アーモスト大学の資料室に保管してあるこの文献は4ページから成り、その内1ページは卒業生の従軍歴に割かれている。内村はそこに次のように記している。「何の戦歴もない。それどころか、私は戦争を憎む。日本がロシア、ドイツと戦火を交えたときに、私は、反戦の意を表明し、かつ著した。(中略)人と人とが戦うは恥ずべきことである。戦争から善なるものが生まれたことはない。」

内村は1930年3月に生涯を終えたが、それは日本が満州を侵略する約1年前のことであった。内村が予想したように、この日本の侵略行為は人類史上最大の戦争に発展していった。内村の死の3ヶ月後には、彼の優秀な弟子の一人である藤井武が亡くなった。藤井は才能豊かな詩人で、師の内村よりもさらに徹底した平和主義の立場をとっていた。死の直前に藤井は、「亡びよ」という預言者的な詩を発表している。この詩の中で、彼は日本の破滅を予見し、更には、かつてソドムが被ったような破滅さえ望んだのであった。なぜなら、日本もソドム同様、墮落していたからである。藤井は次のように預言している。日本はやがて「東から来た鱈」 アメリカを意味する に飲み込まれることであろう。それは主の御手にある「怒りの杖」の役割をなす、と¹⁸⁾。彼らの弟子の一人は、藤井を日本のエレミヤであると評した。というのも、エレミヤは主に破滅を預言し続けた人物だからである。また、内村については日本のイザヤであると評した。なぜなら、内村の預言は希望をも含んでいたからである。

上述の通り、多くの日本人がキリスト教に、更には、社会主義や平和主義などの思想に魅了された。しかし、人生のある時期に至って、心変わりしてしまう者、すなわち「改宗」してしまう者も少なくなかったのである。例えば、内村の友人である徳富蘇峰が挙げられる。彼は、内村と似たような経歴を経て、リベラルな雑誌「国民之友」の編集者となった。この雑誌には、内村も重要な論説を幾つか発表している。しかし、徳富は、反政府の論客から堅固な政府支持者へと転身し、やがて軍国主義的な国粋主義者となり、過去に洗礼を受けたことを否定するようにさえなった。彼は長寿であったが、第二次大戦後は公職追放を受けることとなった¹⁹⁾。

当然のことながら、第二次大戦以前や最中では、政府の路線に従う方が、それに反抗して立ち上がるよりも安全であった。内村自身は政府の迫害を受けることはなかったのであるが、それはおそらく、彼が、すでに1904年に国家的な舞台から身を引いて、宗教的な著作活動に専念していたからであろう。しかし、かつての「万朝報」の同僚などは苦難の道を歩むこととなった。その中でも有名なのが幸徳秋水で、堺利彦と共に創刊した週刊誌「平民新聞」に『共産党宣言』の訳文を掲載したために投獄されることとなった。後に彼は、徐々に無政府主義に傾倒してゆく。1910年には、具体的な実行を企てていたという証拠が無かったにもかかわらず、明治天皇暗殺計画の罪で友人達とともに逮捕、起訴され、幸徳とその愛人菅野スガを含む12名が、1911年1月に処刑された。

ところで、内村と彼の友人達は、確かに、平和主義を初めて公に表現し、日露戦争という文脈の中でそれを行ったのではあるが、しかし、日本で初めて平和主義の信念を抱いた人物であったというわけではない。彼らの先駆者として、日清戦争前夜の1894年に25歳の若さで自ら命を絶った悲劇の人物、北村透谷が挙げられる。北村は、青年時

代から極めて知的で感情的な人生を送った著名な詩人、評論家であった。また、彼はキリスト教から、特に東京で知り合ったクェーカー教徒から強い影響を受けた。彼は、何にも増して平和の価値を信じ、愛国主義と民族主義に反対したのである。1889年に、彼は日本で初めての平和主義団体「日本平和会」を設立している。世間の耳目を集めることはなかったが、それでも、北村は数名の賞賛者を得たのであり、その中には、キリスト教徒であり、平和主義者であり、一時期は社会主義者であった著述家の木下尚江がいた。振り返って考えれば、北村とその支持者こそが日本の平和主義のパイオニアであったと思われるのであるが、日露戦争の時代までには、彼らはほとんど忘れ去られてしまったのである。

これまで言及してきた人物はすべて、キリスト教、あるいは社会主義、またはその両者という、確固とした思想的基盤に基づいて自身の立場を表明した知識人であった。しかし、日露戦争に対し異議を唱えた声には、彼らとは別の、明瞭ではあるが、全く異なった方向からのものも存在したのである。それは、当時最も傑出した叙情詩人、与謝野晶子のものであり、彼女は驚くべき戦争非難の詩を発表したのである。この詩は、決して平和主義に基づいて書かれたものではないにもかかわらず、平和主義の詩の傑作として数え切れないほど頻りに引用されてきた。この詩は何らかの思想的立場から生み出されたのではなく、むしろ、個人的な、更には、自己中心的な立場から生まれたのである。とはいうものの、その詩が生み出された背景や、その詩の背後にある意味が、作品に幅広い含みを持たせているのである。

与謝野晶子は、大阪市近郊の堺市で、有名な和菓子店を営む家庭に生まれた。彼女は、後に夫となる近代詩人、与謝野鉄幹の影響を受け、1901年に短歌集『みだれ髪』を出版して一躍有名になる。彼女の作品は、古典的文体で書かれているとはいえ、愛、性、女性解放等を、大胆かつ斬新な手法で詠い上げているのである。

1904年10月、与謝野晶子は、自分と夫が編集する雑誌「明星」に、一つの長編詩を発表した。その中で、彼女は、旅順口包囲軍に従軍している弟に向かって、戦争で命を落とすことがないようにと懇願している²⁰。

詩の第一節で、与謝野晶子は、末子として、とりわけ親の愛を一身に受けて育った彼女の弟に関する感情的な側面を表現している。しかし、ここで彼女はまた、別の話題を持ち出して、次のように問いかけている。すなわち、両親は弟に戦争の仕方など教えなかった。彼は軍人の家に生まれたわけではないのだ。そのような弟が、戦争と何の関わりがあるというのか、と。この観点は第二節で更に強調されることとなる。弟の家は商人の地位にあり、商人の地位こそ、この家の守るべき伝統なのだということである。この見解は、全ての国民が相互の責任のもとに結び付けられているという国民国家の理

念が、当時は未だ自明の事柄ではなかったということを示唆しているように思われる。詩の中で、与謝野晶子は、古い社会制度、あるいは、諸階級に厳格に区別されていた徳川時代の社会制度を代表しているのである。侍が戦うことになっているのであり、商人は戦闘に活動的に参加することはない、ということである。彼女はまた、故郷への忠誠も表現している。つまり、与謝野家は堺の出身であり、堺に属しているということである。封建時代においては、人々は彼らの地方のコミュニティーやその領主に忠誠を誓っていたのであり、未形成であった国家という理念に忠誠を誓うことはなかったのである。そして、与謝野晶子も、未だ旧時代の価値観に沿って物事を考えていたように思われる。

第三節に入ると、与謝野晶子は、維新後に重要な存在となった天皇について言及している。彼女が天皇について挑戦的に語っていることを見ると、天皇の神性への信仰は未だ深く根付いていなかったということが解る。1930年代の日本であれば、誰もこのような発言はできなかつたであろうし、仮にしたとしても、直ちに検閲機関がそれを抑圧したであろう。彼女は、実際には、十分な敬意を払って天皇について語ったわけであるが、それでも、天皇自身が戦地で戦うのではないことを示唆し、天皇はおそらく、戦争が何を引き起こすのかということすら理解していない、とほのめかしているのである。もしも、天皇が実際に戦争の意味を解っていて、臣民を獣のごとく、いたずらに死なせるのであれば、その罪は更に悪いものとなるからである。

第四節では、与謝野晶子は再び感情的な側面に立ち返って、先の戦争で未亡人となり、今また息子を取り上げられた母親の心痛について詠っている。また彼女は、政治家が天皇の名の下に平和と安全を約束したものの、彼らの約束が根拠のないものとして露呈したことに対して抗議をしている。第五節では、夫を戦地で失った場合、無防備なまま後に残される若い花嫁の悲嘆が、再び感情的に描かれている。

与謝野晶子の詩は、愚かな殺戮に抗議しているとはいうものの、平和主義の見解を表明したものではない。彼女の抗議は、主として個人的で、私的なものであり、国家的な問題は彼女にとって意味を持たなかつたのである。与謝野晶子は、弟が戦線から逃亡して、堺にある古い菓子屋の勘定台という彼の居場所に戻って来ることを期待していた。彼女は、弟の戦友もまた戦地から逃亡し、そのようにして戦争は終わるべきであるということを示唆していたのであろうか。確信を持ってそのように言うことはできない。しかし、親や家族や家への原初的な忠誠の感情を語る個人的な態度は、新しい政治的現実を受け入れることや、個々人がそれぞれの居場所を知っており、忠誠が最も近い者へと向けられる封建領土の集合体ではなく、国家の超越的権力へと日本が転換して行くことを受け入れることに対して、拒絶を示しているのであろう。

この詩は、1904年10月1日に「明星」に発表されたのであるが、驚くべきことに、3年前に裸婦像を含んだ西洋画の複製を掲載したとして、一時期「明星」の発行を指し止めたほどの検閲を通った。一婦人の声がこれほどの反響を呼び起こすとは政府も予想しておらず、むしろ無視することにした、ということが考えられる²¹⁾。しかし、与謝野晶子は、彼女の立場を快く思わない文筆家達によって激しく批判され、反逆罪や不敬罪に当たると非難されることとなった。これに対して、与謝野晶子は、「明星」の11月号に「ひらきぶみ」を掲載し、自分は戦争に異議を唱えているのではなく、戦争ができる限り少ない犠牲で、一刻も早く終結してほしいと願っているだけだ、と弁明した。彼女によれば、詩とは感情表現の手段であって、彼女は単にその詩の中で弟の無事を祈る気持ちを表現しているに過ぎないのである。とはいえ、「ひらきぶみ」にはまた、政府のプロパガンダに反映されているような、殺戮や死を美化することへの拒絶が暗示されているのである。彼女は、日本の古典文学のどこにも、国や天皇のために死ぬという要求は見当たらないと主張しているが、同時に、彼女と家族の天皇に対する忠誠を再確認している。彼女の立場はアンビヴァレントなものだったのである。少なくとも、感情的にも本能的にも戦争には反対であったと言えるが、一方では、一義的に平和主義的な立場をとっているとの供述を否定し、もう一方では、政治的手段ではなく感情表現の芸術として、詩の自律性を主張する、といったような立場だったのである。

数ヶ月の間、与謝野晶子の詩に関する論争が紙面を賑わしたが、次第に廃れていった。その多くが彼女に敵対する反応であったが、それでも、数名の文筆家は彼女の擁護に立ち上がった。与謝野晶子自身は、彼女の反戦の姿勢が思想的なものというよりは個人的なものであったことを後に証明することとなった。彼女は、1928年の中国旅行の後、1942年5月に他界するまで、日本のアジアにおける戦争を称賛する民族主義的な詩をいくつか発表したのである。1932年6月に発表した詩「日本国民 朝の歌」は、天皇の神聖な統治への紛れもない賛辞から始まっている。また、晩年の一作品では、海軍将校を務めている息子に向かって、勇敢に戦って来いと励ましているのである。弟に戦うなかれと懇願したその時以来、彼女の見解には根本的な変化が起こっていたのであった。約30年前には、何をにおいても第一に、彼女自身の個人的な家族と一体感を抱いていた与謝野晶子は、今や、日本国民を慈悲深い父である天皇によって導かれる、一つの大きな家族にたとえた公認の路線を採り入れたように思われる。そうだとすれば、弟に向けた彼女の詩の発表は勇気と決断の表明ではあったものの、しばしば主張されたような平和主義的な立場に属するものではない、と結論を下すことができるであろう。

さて、以上で戦争に反対する二つの立場を見てきた。一つは思想的なものであり、もう一つは個人的なものである。当時も、その後の数十年間も、両者が日本の大衆に実質

的な影響を与えるという可能性はなかった。キリスト教そのものと同様に、また社会主義や共産主義と同様に、平和主義の日本への浸透は、長く、困難な過程であり、誠実な支持を得たものの、それは極めて少数派のものであった。近代日本における平和主義思想家は正統主義的な路線ではなく、むしろ様々な種類の異端の代表者だったのである。彼らは皆、並外れた人物ではあったが、日本の国粹主義に反対して、確固とした思想的基盤に依拠していた。彼らの意図は、人間や世界についての新しい見解を採り入れることにより、日本社会の基礎を取り替えようとすることにあった。しかし、その声は、荒野に叫ぶ声であり、実際の影響はわずかなものだったのである。

それでもなお、内村の立場は幾らかの忠実な支持者を得た。第二次世界大戦の直前に、日本人キリスト教徒の指導者の大半が、国粹主義の採択を迫る政府の指令に屈したとき、内村の優秀な弟子の数人は、師の歩んだ道をあくまでも支持し、そのために戦争の間中、罰せられることとなった。戦後、彼らの地位は回復し、更には、短い期間ではあったものの、公的機関に迎え入れられた。内村の　そして、更には藤井の　預言が間違っていなかったことが判明したのである。つまり、彼らは国民に向かって、軍国主義は自らの破滅を招くだろうと警告したのであるが、実際にそれが起こったのである。一見すると、その後、平和憲法の採択に至って、内村の勝利は完結したかに思われる。しかし、それはあまりにも小さな勝利であった。内村のキリスト教の夢は実現していなかったのであり、今日の日本の物質主義と混乱状態を見れば、彼のピューリタンの精神は衝撃を受けるに違いない。また、平和主義の理念そのものに関して、平和憲法に反対する声が巷に少なからず聞かれる今、日本がどこまで平和主義を維持していけるか見守ってゆかねばならない。これらの声が、ついには、日本が戦争を行うことで紛争の解決を試みる「普通の国」の一群へと回帰してしまうのに十分なほどに、強く、強硬なものになって行くという可能性は排除できないからである。

注

- 1) Bamba Nobuyo & John F. Howes, eds., *Pacifism in Japan—The Christian and Socialist Tradition*, Kyoto, 1978.
- 2) Irwin Scheiner, *Christian Converts and Social Protest in Meiji Japan*, Berkeley, 1970.
- 3) C. R. Boxer, *The Christian Century in Japan 1549–1650*, Berkeley, 1967.
- 4) R. H. Drummond, *A History of Christianity in Japan*, Grand Rapids, 1971.
- 5) John F. Howes, *Japanese Christians and American Missionaries*, in: Marius B. Jansen, ed., *Changing Japanese Attitude Towards Modernization*, Princeton, 1965, pp. 337–368.
- 6) Carlo Caldarola, *Christianity: The Japanese Way*, Leiden, 1979.
- 7) Uchimura Kanzo, *Eibun chosaku zenshu*, Vol. 1, 1971–72.

- 8) Nitobe Inazo, *Bushido – The Soul of Japan*, New York, 1905.
- 9) 小沢三郎 『内村鑑三不敬事件』, 新教出版社, 1961年 .
- 10) R. Tsunoda et al., *Sources of Japanese Tradition*, Vol. 2, New York, 1964.
- 11) Uchimura Kanzo, *Eibun chosaku zenshu*, Vol. 5, 1971–72, pp. 66–75.
- 12) 内村鑑三 『内村鑑三全集』第36巻, 岩波書店, 1983年, p. 414 .
- 13) John F. Howes, *Kanzo Uchimura on War*, in: *The Japan Christian Quarterly*, V. 24, 1958, pp. 290–292.
- 14) 内村鑑三 『内村鑑三全集』第11巻, 岩波書店, 1981年, p. 296 .
- 15) 内村鑑三 『内村鑑三全集』第37巻, 岩波書店, 1983年, pp. 10–11 .
- 16) 内村鑑三 『内村鑑三全集』第13巻, 岩波書店, 1981年, p. 404 .
- 17) Doron B. Cohen, *Uchimura Kanzo on Jews and Zionism*, in: *The Japan Christian Review*, Vol. 58, 1992, pp. 111–120.
- 18) Fujii Takeshi, *Be Ruined*, (Translated by Sato Isao), in: *The Japan Christian Quarterly*, V. 31, 1965, 191–192.
- 19) Richard E. Systma, *A Comparative Portrait of Two Meiji Patriots: Tokutomi and Uchimura*, in: *The Japan Christian Quarterly*, V. 43, 1977, pp. 222–230.
- 20) 以下の説明に関しては、脚注末に掲載した詩を参照のこと。
- 21) Steve Rabson, *Yosano Akiko on War: To Give One's Life or Not – A Question of which War*, *Journal of the Association of Teachers of Japanese*, Vol. 25, 1991, pp. 45–74.

付録

君死にたまふこと勿れ
(旅順口包圍軍の中に在る弟を歎きて)

あゝをとつとよ君を泣く
君死にたまふことなかれ
末に生れし君なれば
親のなさはまさりしも
親は刃をにぎらせて
人を殺せとをしへしや
人を殺して死ねよとて
二十四までをそだてしや

堺の街のあきびとの
旧家をほこるあるじにて
親の名を継ぐ君なれば
君死にたまふことなかれ
旅順の城はほろぶとも
ほろびずとても何事が
君知るべきやあきびとの
家のおきてに無かりけり

君死にたまふことなかれ
すめらみことは戦ひに
おほみづからは出でまさね
かたみに人の血を流し
獣の道に死ねよとは
死ぬるを人のほまれとは
大みこゝろの深ければ
もとよりいかで思されむ

あゝをとうとよ戦ひに
君死にたまふことなかれ
すぎにし秋を父ぎみに
おくれたまへる母ぎみは
なげきの中にいたましく
わが子を召され家を守り
安しと聞ける大御代も
母のしら髪はまさりけり

暖簾のかげに伏して泣く
あえかにわかき新妻を
君わするるや思へるや
十月も添はでわかれたる
少女ごころを思ひみよ
この世ひとりの君ならで
あゝまた誰をたのむべき
君死にたまふことなかれ

(『明星』1904 明治37 年十月一日号)